

月刊 ウィーン

GEKKAN-WIEN

Monatsmagazin Japanisch

現地オリジナル取材と編集で
ウィーンを伝える月刊情報紙

創刊平成元年 創刊34年目 **Nr. 393**

2022年10月号



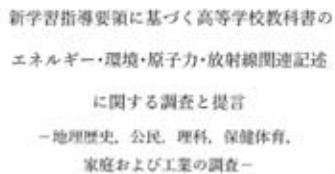
Wilhelm Leibl Kopf eines Bauernmädchens um 1880 Belvedere, Wien

杉本純の原子力の話 II ウィーンと京都

126

日本原子力学会は八月一日、教科書のエネルギー・環境・原子力・放射線関連の記述に係る調査報告書を発表した。同学会の教育委員会が毎年、小・中・高校で用いられる教科書を対象に実施しているもので、今回は、新学習指導要領に基づき二〇二二年度から使用されている高校の地理歴史、公民、理科、保健体育、家庭、工業の各教科の検定済み教科書計七十二点を調査し、エネルギー・環境・原子力・放射線に関連した記述（写真、図・グラフも含む）、これに対するコメント・修文例を整理。エネルギーや原子力に関する教育の改善につながるよう意見・提言をまとめた。

地理総合では、今回調査した教科書六点中五点が資源・エネルギー問題について取り上げており、発展的学習として、国ごとのエネルギー事情の比較、日本の電源別発電量の推移など、資料を提示した上で、エネルギーの将来についてディスカッションを通じ考えさせる記述もあった。そこでは、「従来通り、化石燃料を中心に」、「原子力発電との共存を図る」、「再生可能エネルギーに迅速に移行する」の三つの主張をあげ、自身と意見の異なるグループとのディスカッションを経て「自分の意見はどっち変わったか」を考えさせる内容となっており、今回の報告書では「理解を深め考察を促す効果的な内容」と評価している。



https://www.jaif.or.jp/journal/japan/14432.html
https://www.aesj.net/uploads/kyoukasotyousa_wghoukokusyo2022.pdf

への配慮、経済性も含めた総合的な観点、長期的な視点から言及するよう要望している。

福島第一原子力発電所事故に関しては、化学基礎と「科学と人間生活」を除くほとんどの教科書が記述。カーボンニュートラルについては、地理総合と物理基礎の計四つの教科書が取り上げていた。電力の需給バランスについては、二〇一八年の北海道胆振東部地震に伴う大規模停電を例に挙げ、「火力発電・水力発電・原子力発電に加え、太陽光発電や風力発電などの再生可能エネルギーなどをふくめたうえで、電力の需給バランスを維持する必要がある」などと記述し、詳細に説明している教科書があり、報告書では「大変適切」と評価。高レベル放射性廃棄物の処分問題を取り上げた教科書も多くあったが、「科学的特性マップ」に触れていたのは一点のみだった。

さて、今月のウィーンと京都の対比では、両市出身の偉大な経済学者・思想家を紹介したい。一八四〇年にオーストリア領カリツィア地方ノイザンデツ（現ポーランド、ノヴィ・ソント）に生まれたカール・メンガーは、ブラハ大学とウィーン大学で法律を学び、後にクラクフ大学から博士号を受けた。六〇年代にレンペルク新聞社及びウィーン新聞社で経済ニュース担当記者として働いた。その過程で、古典派経済学の価格決定についての理論と実際の市場での値動きとの不一致に気付いて研究し「国民経済学原理」を出版して新しい経済学を打ち立てた。これにより、経済学のオーストリア学派（限界効用学派）の祖となった。七二年にウィーン大学法学部に私講師として招かれ、七三年には経済理論の員外教授に迎えられた。七六年以降はオーストリア皇太子であるルドルフ大公の経済学と統計学の家庭教師を務め、七八年には皇帝フランツ・ヨーゼフ一世よりウィーン大学経済学正教授に任命された。八〇年代の終わりにはオーストリアの通貨制度を改革する委員会の長に任命され、その後の一〇年間に「資本論」、「貨幣論」など貨幣理論を革新しようとする大量の論説を著した。四月号の偉大な数学者（その二）で紹介したカール・メンガーは彼の息子である。また、メンガーの蔵書の一部約二万冊は、第一次世界大戦後、旧制東京商科大学によって購入され、同大学の後身である一橋大学の社会科学古典資料センターが所蔵する「メンガー文庫」として公開されている。一方、一九〇二年に京都府に生まれた今西錦司は、府立

第一中学校（現洛北高等学校）を卒業後、第三高等学校を経て、二八年に京都帝国大学農学部を卒業した。四〇年に理学博士号を取得し、五四年より京大人文科学研究所員、五九年に同所教授となる。六二年より京大理学部教授を併任し、六五年に京大退官後、岡山大学教授を経て岐阜大学総長を務めた。三三年頃のケゲロウの種間の比較観察による発見から、棲み分け理論を唱え、種社会の概念を基礎とする生物社会構造の理論を打ち立てた。第二次世界大戦後は、京都大学理学部と人文科学研究所において、二ホンザル、チンパンジーなどの研究を進め、日本の霊長類社会学の礎を築いた。京都大学理学部自然人類学講座、京大霊長類研究所の創設に寄与した。西欧の生存競争を強調する進化論を批判し、種社会の主体性と共存の理論に立脚する独自の進化論を唱えた。人類学、霊長類学にとどまらぬ広い分野にわたって、梅棹忠夫を始め多くの後進を育てた。今西は非常に影響力が強く、特に京都大学を中心とする影響の強い人々をまとめて今西学派、今西グループ、あるいは新京都学派などと呼ぶことがある。登山家、探検家としても知られ、モンゴル、カラコルム、アフリカなどへの多くの調査隊を組織し、自ら率先して野外調査を進めた。また、八五年には日本国内の一五〇〇山の登山を記録した。著書に「生物の世界」、「私の自然観」など多数。日本山岳会会長を務め、七九年に文化勲章を受章した。

余談であるが、教科書に関する調査報告書は、教育委員会下のワーキンググループが実作業をしており、筆者は長年このグループのメンバーであり、昨年から主査を務めている。メンガーの経済学には縁はなかったが、今西の「私の自然観」だけは読んだことがある。今月も両市に関連する偉大な経済学者・思想家を紹介することができた幸運に感謝しつつ、ウィーン大学が所蔵するメンガーの写真を掲載させていた

だ。



肖像画（ウィーン市所蔵）



肖像メダル（ウィーン大学所蔵）



肖像メダル（ウィーン大学所蔵）



ウィーン大学中庭にある記念碑



中央墓地にある記念墓石

杉本純 元京都大学教授

元原子力機構ウィーン事務所長



肖像画（ウィーン市所蔵）